

立間祥介訳

三 国 志

平凡社

立間祥介訳

三 国 志 三

訳 者 紹 介

立間祥介 1928年東京生。善隣外事専門学校卒。
専攻 中国文学。慶応義塾大学教授。主訳書『従文自
伝』（河出書房）『中国講談選』『呼蘭河の物語』『児
女英雄伝』『今古奇観』（共訳）（平凡社）『駱駝祥子』
（岩波書店）

三 国 志 コンパクト版 第三巻

発行日 一九八九年 一月二〇日 初版第一刷

定 価 一〇〇〇円

訳 者 立間祥介（たつま・しょうすけ）

発行者 下中 弘

発行所 株式会社 平凡社

〒一〇二 東京都千代田区三番町五

電話・東京（〇三）二六一―一七六五（編集）

（〇三）二六五―〇四五五（営業）

振替・東京八一二九六三九

印刷 東洋印刷株式会社

製本 和田製本工業株式会社

落丁・乱丁本は小社サービス係でお取替えいたします（送料小社負担）

ISBN4-582-32513-0

三國志主要人名表 配列は五十音順。

袁^{えん} 熙^き (?—一三〇) 字は顯奕。袁紹の次子。

袁^{えん} 術^{じゆつ} (?—一八九) 字は公路。袁紹の従弟。淮南(九

江)で成を建て、一時帝位を僭称する。

袁^{えん} 尚^{しやう} (?—一三〇) 字は顯南。袁紹の末子。

袁^{えん} 紹^{しやう} (?—一三三) 字は本初。漢の名門の出で河北に

強大な勢力を張る。性は優柔不斷、ために官渡で曹操に大敗を喫する。

袁^{えん} 譚^{たん} (?—一三〇) 字は顯思。袁紹の長子。

王^{きう} 允^{いん} (?—一三六) 字は子師。憂国の文官。董卓暗殺

の立役者。

賈^か 詡^く (?—一三三) 字は文和。はじめ董卓に仕え、の

ち曹操に仕える智將。

郭^{かく} 嘉^か (?—一三三) 字は奉孝。曹操の片腕といわれた

幕僚。

郭^{かく} 汜^ふ (?—) 幼名阿多。董卓の部將。李傕とともに、

一時天下をとる。

夏侯淵^{かこうえん} (?—一三六) 字は妙才。夏侯惇の従弟。惇と

もに曹操の挙兵に参加、以来数々の戦功を立てる。

夏侯惇^{かこうたんと} (?—一三〇) 字は元讓。曹操挙兵以来の部將。

曹丕即位のとき大將軍となる。

何^か 進^{しん} (?—一八九) 字は遂高。靈帝の外戚で無能な成

上り者。

関^{かん} 羽^う (?—一三六) 字は雲長。劉備に兄事する文武両

全の名將。信義に厚く、大薙刀をとっては天下無敵。

蜀の五虎將の一。

甘^{かん} 寧^{ねい} (?—一三三) 字は興霸。孫權の部將。

魏^ぎ 延^{えん} (?—一三四) 字は文長。劉表の部將。のち劉備

に仕える。

許^{きょ} 褚^{ちよ} (?—) 字は仲康。曹操の武將。親衛隊長として

常に身辺に侍す。

黃^{かう} 董^{たう} (?—) 字は公覆。孫堅父子三代に仕えた部將。

赤壁の合戦に際し苦肉の計を献じる。

公孫瓚^{こうそんさん} (?—一九九) 字は伯珪。河北の豪族で劉備の学

友。

黃^{かう} 忠^{ちゆう} (?—一三〇) 字は漢升。弓の名手。劉備父子に

仕えた蜀の五虎將の一。

孔融（二五—三〇）字は文舉。孔子二十世の孫。文名

高く建安七子の一に数えられる。

周倉（？—二〇）黄巾の殘党で、関羽を慕つてその

部将となる豪傑。正史には見えない。

周泰（？）字は幼平。孫策・孫権の部将。

周瑜（二五—三〇）字は公瑾。孫策の義弟。孫権を助

け、呉の大都督として赤壁の合戦で威名を馳せる智

将。

荀彧（二一—三三）字は文若。曹操の幕僚。

諸葛瑾（二五—三三）字は子瑜。諸葛亮の兄。孫権の幕

僚。

諸葛亮（二一—三三）字は孔明。別名臥竜。襄陽郊外の

隆中に隱棲中すでに天下三分の計をたて、劉備の三

顧の礼にこたえて出鷹、非力の劉備を助けて蜀を建

てる不世出の奇才。

徐庶（？）字は元直。一名单福。諸葛亮の学友。は

じめ劉備の軍師、のち曹操に仕える。

曹仁（二六—三三）字は子孝。曹操の従弟。曹操に従

つて転戦、曹丕即位後、大司馬となる。

曹操（二五—三〇）字は孟德。幼名阿瞞。「乱世の奸

雄、治世の能臣」といわれ、権謀術数にたけた文武

両全の英雄。幕下に多くの人材を集め、天機をつか

んで中原を統一、魏王となる。魏の武帝。

曹丕（二六—三六）字は子桓。曹操の長子。文武両道

にたけ、のち献帝を廃して魏を建てる。魏の文帝。

孫堅（二五—三〇）字は文台。孫子の末孫。弱年より

勇名をうたわれ、董卓討伐戦で洛陽一番乗りの偉功

を立てる。

孫權（二五—三三）字は仲謀。孫堅の次子。父兄の業

を継ぎ呉を建てた名君。呉の大帝。

孫策（二五—三〇）字は伯符。孫堅の長子。堅の没後、

幕下に人材を集めて江東の基礎をきずく。

趙雲（？—三三）字は子龍。劉備に仕え当陽の長坂

坡で単騎百万の敵中を突破、幼主劉禪を救出した英

雄。

張角（？—一八）読書人出身の黄巾の乱の首謀者。

大賢良師・天公將軍と自称。

張郃（？—三三）字は儁乂。袁紹の部将。のち曹操

に仕える。

張松（？—三三）字は永年。劉璋の幕僚。劉備に益

州の地図を獻じ入蜀の手引きをする。

張昭（二六—三六）字は子布。孫策・孫權の幕僚。孫

策の信任を受け、呉の重鎮となる。儒学の造詣深く、

「春秋左氏伝解」「論語注」を著わす。

貂蟬（？）王允の館の妓女。王允の意をうけて董卓

の侍妾となり、呂布を董卓暗殺にはしらす美女。正

史には見えない。

張飛（？—三三）字は翼徳。劉備・関羽に兄事する。

直情径行、武勇拔群の勇將で、長坂橋では一喝、曹

操の大軍を退ける。蜀の五虎將の一。

張遼（二六—三三）字は文遠。はじめ呂布に仕え、の

ち曹操の部將となる。情義に厚く、関羽と肝胆相照

らす仲となる。

張魯（？）字は公祺。五斗米道の教祖として三十年

にわたり漢中に君臨、のち曹操に降る。

陳宮（？—一九）字は公台。曹操打倒を念願とする

呂布の幕僚。

陳琳（？—二七）字は孔璋。建安の七子の一。文才

をもつてはじめ袁紹に仕え、のち曹操に仕える。

程昱（二四—三〇）字は仲徳。曹操の幕僚。

程普（？）字は徳謀。孫堅父子三代に仕えた文武両

全の部將。

陶謙（三一—三六）字は恭祖。徐州の牧。劉備に徐州

を讓る。

董卓（？—一九）字は仲穎。残忍好色な隴西の豪族。

強大な武力を背景に獻帝を擁立し、專横をきわめる。

馬超（二六—三三）字は孟起。馬騰の長子。劉備父子

に仕えた蜀の五虎將の一。

馬騰（？—三三）字は寿成。漢の伏波將軍馬援の末孫。

巨軀強力の隴西の豪族。

龐統（二七—三四）字は士元。別名鳳雛。劉備の軍師。

諸葛亮と並び称される知恵者。

李傕（？—一九）董卓の部將。董卓の没後、郭汜と

ともに長安に乱入し、一時天下をとる。

劉琦（？—三六）劉表の長子。温厚篤実の人であつ

たが継母蔡氏にうとまれ、江夏へはしって劉備の庇

護下にはいる。

劉協（二一—三四）後漢第九代の皇帝。獻帝。曹丕に

廃され山陽公となる。

劉璋（？—三六）字は季玉。益州の牧。暗愚のため、

手を拱いて劉備に益州を奪われる。

劉禪（二〇七—二七二）字は公嗣。幼名阿斗。劉備の子。

宦官を寵愛して亡国を招く暗君。蜀の後主。

劉備（二〇七—二三三）字は玄德。漢の中山の靖王の末孫。

黄巾の乱にさいして関羽・張飛とともに挙兵。軍師

諸葛亮の助けを得て蜀の主となる。蜀の昭烈帝。

劉表（二四—一二〇六）字は景升。荊州の牧。

呂布（？—一九〇）字は奉先。後漢末随一の武勇をう

たわれながら、転変常なき性格のため天下の嫌われ

者となる。

魯肅（二二—二三三）字は子敬。孫權の幕僚。蜀との提

携に腐心する。周瑜の没後、呉の大都督となる。

目次

第三十五回

玄德げんたく 南漳なんしょうで隠淪いんりんと逢あひ
 単福たんぷく 新野しんやで英主えいしゅと遇あう

3

第三十六回

玄德げんたく 計けいを用もちいて樊城はんじやうを襲おそひ
 元直げんちき 馬うまを走はらせて諸葛しよかつを薦すすむ

20

第三十七回

司馬徽しばけい 再び名士めいしを薦すすめ
 劉玄徳りうげんたく 三たび草廬そうりふを顧おもう

38

第三十八回

三分さんぶんを定さだめて 隆中りゅうちゆうに策さくを決けつし
 長江ちやうかうに戦いくさつて 孫氏そんし 饒たかを報はす

64

第三十九回

荊州城けいしゆうじやうに公子こうし 三たび計けいを求もとめ
 博望坡はくぼうばに軍師しんし 初はめて兵へいを用もちう

86

第四十回

蔡夫人さいふじん 議ぎつて荊州けいしゆうを獻けんじ
 諸葛亮しよかつりやう 火ひもて新野しんやを焼やく

108

第四十一回

劉玄德りうげんたく 民たみを攜たづへて江かうを渡わたり
 趙子竜ちやうしりゆう 単騎たんき 主しゅを救すくう

128

第四十二回

張翼徳ちやうよくとく 大いおほに長坂橋ちやうはんきやうを鬧さわがし
 劉豫州りうよしゆう 敗くはれて漢津口かんしんこうへ走はる

153

第四十三回

諸葛亮しよかつりやう 群儒ぐんにゆと舌戦しよくせんし
 魯子敬ろしきけい 力ちからめて衆議しゆぎを排はす

169

第四十四回

孔明こうめい 智ちを用もちいて周瑜しよこを激げきし
 孫權そんけん 計けいを決けつして曹操さうそうを破やぶる

192

第四十五回

三江口さんかうこうに曹操さうそう 兵を折たれ
群英会ぐんえいに蔣幹しやうかん 計あはに中る

213

第四十六回

奇謀を用いて 孔明こうめい 箭やを借り
密計を献じて 黄蓋わうがい 刑を受く

237

第四十七回

関沢かんたく 密かに詐りの降書を献じ
龐統ぼうとう 巧みに連環れんわんの計を授く

257

第四十八回

長江に宴うたげして 曹操 詩を賦し
戦船を鎖くわいで 北軍 武を用う

275

第四十九回

七星壇せいてんだんに諸葛しよかく 風を祭り
三江口さんかうこうに周瑜しよあ 火を縱はなつ

291

第五十回

諸葛亮しよかくりやう 智をもって華容わように算はかり
関雲長かんうんちやう 義ぎによつて曹操さうそうを釈はなつ

312

第五十一回

曹仁さうじん 大いに東呉の兵と戦い
孔明こうめい ひとたび周公瑾しよこうきんを氣らしむ

330

主要人名表

前付

地 図

349

三国年代対照表

350

三^{さん}

国^{こく}

志^し

三

立^た 羅^ら

間^ま 貫^{かん}

祥^{しょう}

介^{すけ} 中^{ちゅう}

訳 作

第三十五回

玄徳げんとく 南漳なんしょうで隠淪いんりんと逢い
単福ぜんぷく 新野しんやで英主と遇う

さて蔡瑁さいばいは城に引き返そうとしたところ、趙雲ちよううんが軍勢をひきいて追いかけて来るのに出会った。もともと趙雲は酒を飲んでいたが、にわかに人馬の動く気配がしたので、急いで中にはいつて見ると、玄徳げんとくの姿がない。驚いて客舎にもどつてみると、人々が、

「蔡瑁が軍勢をひきいて西の方へ急行した」

と言っているのです、すぐさま槍をとるなり馬にまたがり、連れて来た三百の兵をひきいて西門を走り出たところを、蔡瑁と出会ったもの。

「わが君はどこか」

「使君しくんは席をはずされたが、どこに行かれたか存ぜぬ」

趙雲は細心な人であるから、軽率に事を荒ら立てるようなことはせず、馬を急がせて先へ行つてみると、はるかに広い谷川があつて、他に道がないので、ふたたび馬を返して来て、蔡瑁に迫つた。

「わが君を宴に招いた当の貴公が、軍勢をひきいて追ったりしたのはどうしたことか」

「九郡四十二州県の役人たちがここに集まっておるからは、総大将たるそれがしが、守護いたさぬという法はあるまい」

「わが君をどこへ追いつめたのか」

「使君がただ一騎西門を出られたと聞いたので、ここまで来たがどこにもお見えにならぬのじや」

趙雲は不審に思い、谷川のほとりまで行って眺めて見ると、対岸に水の跡がある。「まさか乗馬のままこの流れを押し渡ったはずもあるまいが」と心の中で言いながら、手勢に命じてあたり一帯をさがさせたが、何の手掛りもつかめない。かくてふたたび馬を返した時には、すでに蔡瑁は城内にはいつていた。そこで門を固める兵士たちを問いつめてみたが、口々に、

「劉使君は馬を飛ばせて西門を出られました」

と言うばかり。もう一度城内にはいつてみようかとも思ったが、伏勢があるかも知れぬと思いなおし、そのまま手勢をひきいて新野^{しんや}への道を急いだ。

さて玄德は的盧^{てきろう}を躍らせて谷川を越えたものの、なお酔いしれたような心地で、「この広い川を一飛びに越えられたのは、天の助けでなくてなんであろうか」と思いながら、そのまま南漳^{なんしょう}へ向け馬を急がせるうち、日もはや西に傾きかける。行くうち、一人の牧童が牛の背にまたがり、

短い笛を吹きながら来るのに行きあった。思わず、

「ああ、わしはあの子供にも及ばぬ身じゃ」

と嘆息して、しばし馬を止めて眺め入った。と、牧童も牛を止め、笛を口から離して、じっと玄徳をみつめていたが、

「將軍は黃巾賊を破った劉玄徳さまではござりませぬか」

玄徳驚いて、

「そちのような片田舎の子供が、何でわしの名を知っているのじゃ」

「わたくしはようは存じておりませぬが、わたくしの師匠が、客のあるたびに、劉玄徳殿は身のたけ七尺五寸、手を垂れば膝を過ぎ、目はよく己の耳を見ることができ、まこと当世の英雄じゃと申しておられます。ただいま將軍のご様子を拝見いたして、たしかに相違ないと思ったのでござります」

「して、そちの師匠と申されるのは」

「わたくしの師匠は二字姓の司馬、名は徽、字を徳操と申され、潁川の人、道号を水鏡先生といわれます」

「どのような方と往来しておられるのか」

「襄陽の龐徳公・龐統さまなどではござります」

「その龐徳公と龐統という方の間柄は」

「叔父甥でござります。龐徳公は字を山民さんみんと申され、わたくしの師匠より十歳年長であり、龐統さまは字を士元しげんと申されて師匠より五歳年下でござります。ある日なぞ師匠が桑の木にのぼって葉を摘んでおられたとき、たまたま龐統さまがお越しになって、そのまま木の下におすわりになり、一日中議論されていたこともござります。師匠はこの龐統さまがことのほかお気に入り、弟と呼んでおられます」

「そちのお師匠は、いまだここにお住まいかな」

牧童は指さして、

「あの林の中にお屋敷がございます」

「わしはいかにも劉玄德であるが、ひとつお師匠に引き合わせていただけぬかな」

牧童は玄德を案内した。二里あまり行つて屋敷の前で馬を下り、中門まで来たところ、にわかに美しい琴の音が聞こえて来た。玄德は牧童が知らせにはいろうとするのを留め、じつと耳を傾けていたが、琴の音はたと止んだ。と思うと、一人の人が笑いながら出て来て、

「良い音が出ておるところへ、とつぜん殺伐な調子がまじつて来た。どこかで英雄が盗み聞きしておるに違いない」

牧童が指さして、

「あれが師匠の水鏡先生でございます」

玄德が見れば、姿は松の如く骨相は鶴の如く、並々の者とは思われぬ人品に、あわてて進み出

處士高星忽爾獎臨珠履上
劉玄德遇司馬徽



將軍俊馬俄然拴繫草堂前

南陽で司馬徽を訪ねた劉備。

て挨拶した。その着物はまだ濡れたままである。

「貴公、今日は幸いに大難を免れましたな」

玄徳がどうしてそれがと不審に思っているところを、牧童が、

「このお方は劉玄徳さまでござります」

と言ったので、水鏡は座敷に請じ入れて、それぞれ座についた。棚には書物が積まれ、窓外には松や竹が植えられ、石卓の上には一張の琴が横たえられて、すがすがしい空気があたりにみながっている。

「貴公、いずれよりお越しなされた」

「ここを通りかかって、はしなくもかの童に教えられ、尊顔を拝することができましたのを、うれしく存じます」

「いやいや、お隠しあるな。今日は危地を逃れてここにおいでなされたものであろうかの」

水鏡が笑ったので、玄徳が襄陽での出来事を逐一話すと、

「貴公のご気色で、とうに察しておった」

と言い、

「大名はかねてより耳にしておったが、どうしてかほどまで零落されたのかな」

「好運に恵まれず、このような境遇にありまする」

「そうではあるまい。貴公の左右に人材がおらぬからであらうが」